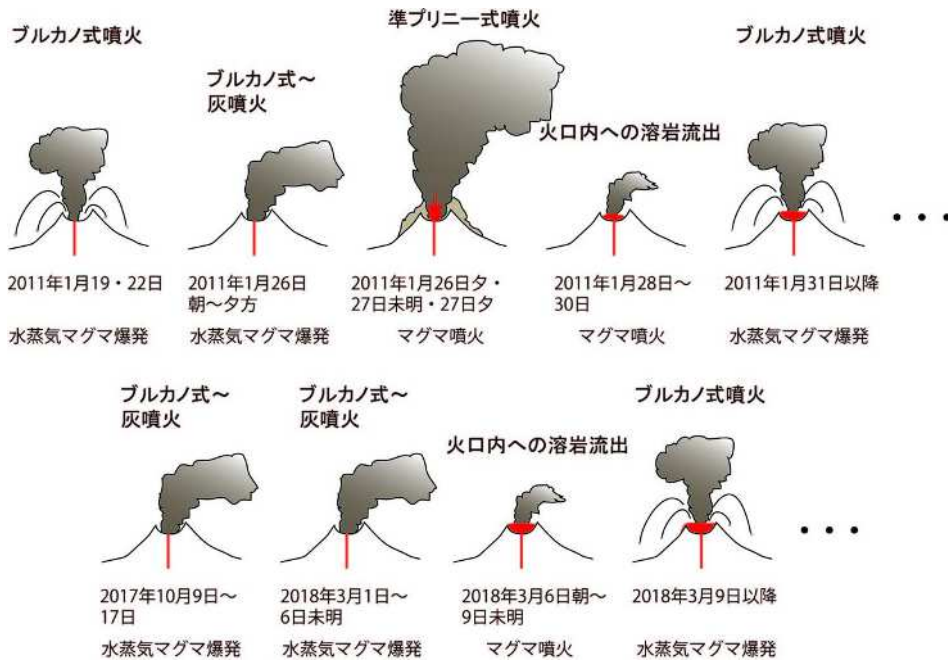




霧島連山・新燃岳で高度8000mに達する爆発的噴火が発生しました

活発な活動が続いている新燃岳ですが、4月5日にはこれまで最高の高さ8,000mまで噴煙が上昇する噴火がありました。現在気象庁では噴火警戒レベル3で、入山規制を実施していますが、鹿児島大学で火山学を専門とする井村准教授によると、本当に恐ろしいのは現在続いているブルカノ式噴火(粘り気の強い溶岩が流出する噴火)からプリニー式噴火(溶岩だけでなく大量の火山灰を噴出し、住宅などを埋め尽くす事がある。ポンペイの遺跡を作った噴火がこのプリニー式噴火)へ移行する事だそうです。以下は井村さんのツイッターに掲載されている図ですが、新燃岳は2011年には準プリニー式噴火を起こしており、防災上極めて危険な状態になった事がありました。実際、1716年から17年に発生した噴火(亨保噴火)では、このプリニー式噴火を起こしており、神社仏閣など約600軒が消失しています。プリニー式噴火が発生すると、一瞬のうちに住宅が火山灰で覆われたり、火災が発生する可能性があるのです。



20世紀は火山活動が実に静かな世紀だった

実は第二次世界大戦後の日本は、まともな“噴火”を経験していないのです。比較的信頼のおける記録がある江戸時代以降 19 世紀まで、1 回の噴火で数億立方メートル以上の噴出物を出すような大噴火が各世紀に 4 回以上発生しています。ところが、20 世紀に入ると 1914 年の桜島の大正噴火、1929 年の北海道駒ヶ岳噴火の 2 回だけで、それ以降は大きな噴火は発生していないのです。御岳や草津白根の噴火は人的被害が出たので、大きなニュースとなりましたが、噴火の規模としては極めて小規模だったのです。これらの噴火は噴火した季節や時刻が最悪であったのです。

今はっきり言える事は、20 世紀の火山活動は、異常に静かだったという事です。こうした過去の歴史を振り返ると、21 世紀には少なくとも 5～6 回は大噴火が起こると考えるのが自然なのです。

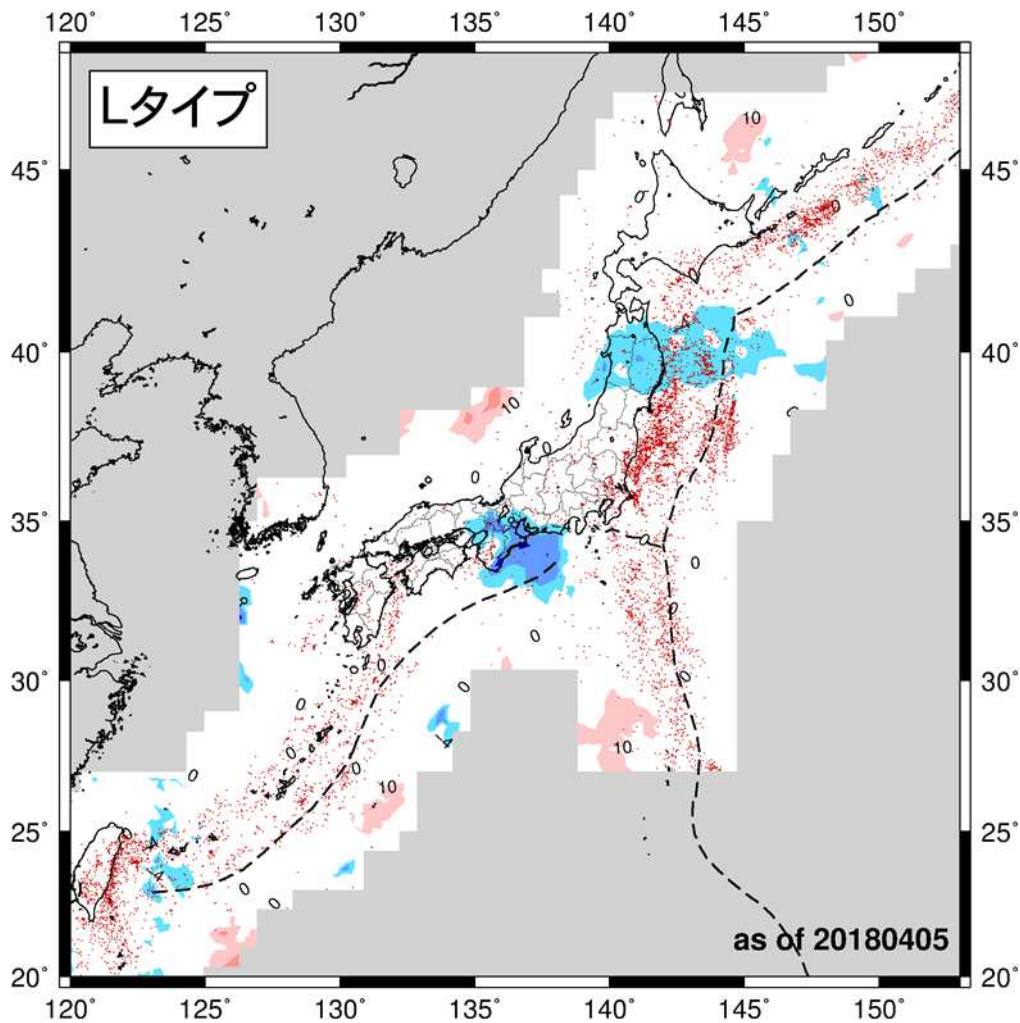


日本およびその周辺の地下天気図®

今回から全く新しい解析をお届けします。2011年の東日本大震災により、東北地方および関東地方では地震発生の様式が大きく変わってしまいました。そのため、日本全国を統一的に解析する事が困難な状態が続いていました。

しかし震災後7年が経過し、かなりの程度地震活動が落ち着いてきました。そこで、現在入手できる気象庁の地震データをすべて使った広域的な解析を今回からお届けします。南は台湾および北は北方領土までがカバーされます。

ちなみに予測の対象となる地震はマグニチュード7ないしそれ以上の大きさの地震となります。



上の地下天気図は4月5日時点の L タイプです。これまでの地下天気図でも現れていました紀伊半島周辺の以上と岩手沖を中心とする東北地方の地震活動静穏化の異常が見て取れます。先週の4月2日のニュースレターでは、西日本の異常は紀伊半島より大阪を中心とする異常でしたが、これは解析期間の違い(今回の地下天気図は2011年以降の7年間、それに対し、先週の西日本の解析では2000年以降の17年間という長期間のデータを使っている)が異常のパターンの違いになっています。これはどちらが正しいという事ではなく、使用している地震データの長さや海域と陸域での地震計の感度の違いを反映しており、両方とも正しい解析結果なのです。



次にお示しするのが M タイプの地下天気図です。M タイプでは、南西諸島付近にも大きな地震活動
静穏化の異常が出現している事がわかります。DuMA では今後も L タイプと M タイプの双方を併用して
解析を行っていきたいと思います。

